
たった独りの人形の たった一度の晴れ舞台

本山 光樹

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

たった独りの人形の たった一度の晴れ舞台

【Nコード】

N5171B

【作者名】

本山 光樹

【あらすじ】

超名門・ステーゼア家の跡取り“マリア”。研究者である父の実験台となり、死を待つ日々を送る彼女。孤独だった彼女の最期は、孤独のままか、それとも…。

前編

ーッ……っ……ひっ……く……ー

その部屋には、少女のものとと思われる泣き声が、木霊していた。

1人で使うには、広すぎる部屋——家。

その家にいるのは、少女。他、多数のお手伝いさん。

少女の親は、それぞれが外国を飛び回っていて、家には2・3年に一回、気紛れで帰るか帰らないか。

そして、その気紛れでさえ、

少女とは、顔を合わせようとしなない。

従って、少女は、ここ4・5年ほど、親の顔を見ていなかった。

けれど、少女は、ただ、待ち続ける。

自分の中にある“能力^{チカラ}”が、目覚めるのを。

ただ、待てばよかった。

少女は、後継者。

この国、リアス国に、後にも先にもないだろうと謳われた、
名門・スティーゼア家の。

たった 1 人の 正 当 な 後継者

名は マリア・ステーゼア

「マリア様、お勉強のお時間です、
どうぞ、こちらのお部屋へ」

「マリア様、おはようございます、
今日もお元気そうでなによりですわ」

マリア様――

マリア様――

マリアを、敬称を付けずに呼ぶ者はいない。

何処に行っても、マリアは、“マリア”ではなく、
“ステーゼア家の後継者”だった。

“マリア・ステーゼア”を認めてくれるヒトは、
何処にもいない。

それが、この、たった13歳の少女にとって、
どれだけ重荷になっただろう？

どれだけ、苦しみを押しつけただろう？

偽善の親切。

打算だらけの友情。

全てが、マリアを取り囲み、逃げ道を塞ぎ、彼女を苦しめる。

マリアは、満足に涙を流すことも、
心から笑うことも出来なかった。

ただ、ステーゼア家の人間として、正当な後継者として、
恥じないよう、失敗のないよう、それだけを、叩き込まれてきた。

―感情はいらない。機能性のよい人形だけが、この家には必要だ―

これが、マリアの父親、トーマ・スTEEゼアの口癖だった。

無能は必要ない、ただ、勝ち残った者だけが、
この家には、必要だ、と。

そんな父親が、マリアの6歳の誕生日に、
たった一つ、くれたものがあつた。

それは、マリアがいつも身に着けているピアス。

スTEEゼア家のものだけが身に着けることを許される、
伝統的なもの。

それを、マリアに渡したと言うことは、曲がりなりにも、
マリアを認めてくれていると言うことで。

ただ、そのピアスだけが、彼女をこの家につなぎ止めていた。

後継者としての資格。

それを言えば、マリアは、完璧だった。
完璧に、彼の理想に叶っていた。

勉強は出来るし、計算も速く、誤算も極少ない。
計算高く、利用することにおいては、誰よりも正確な答えを弾き出す。

彼女は、“後継者”としては、最高の条件を、備え持っていた。
だからこそ、彼は、マリアにピアスを渡し、この家に縛り付けている。

それしか、方法がないから。彼はマリアを、愛していないから。

ただ――

“マリア”として生きてゆくには、彼女は、人間性に欠けすぎていた。

そのせいで、友達はいない。信用はあっても、信頼はない。

マリアは、何処でも孤独だった――

けれど。なんの気紛れか、彼女の両親は、帰ってきていた。それも、マリアの目の前にいる。

「お父様……お母様……」

普段の言葉遣いが抜けない、丁寧な口調で話してはいるが、まだ、13歳の子供だ。

本当は、

- お父さん！お母さん！ -

そう言って、2人に飛びつきたいのだろう。

何しろ、4・5年、会っていなかった両親が、目の前にいるのだ。

けれどそれは、その場の空気が許さなかった。

「マリア、おまえには、今から、実験台となってもらう。
詳細は、クルスから聞いているな？」

重い空気。その言葉が、ぴったりと似合うこの場の空気で、
トーマ・ステーゼアは、口を開いた。

クルスとは、マリアの母親。クルスは、マリアを、
“実験台”に使うということに、合意した。

「はい、お父様……」

マリアは、苦しそうに返事を返す。

さっき彼が言った“実験台”とは、この家の、
そして、全世界のための“実験”だった。

マリアの父、トーマは、リアス国でも、屈指の科学者。

彼が発見したのは、2年前に現れだし、
今や、国、全土に広がり、国民の6割が感染したとされる不治の病。
それを治せる“可能性のある”抗体だった。

このまま放っておけば、いずれ、他国にまで広がるかも知れない。
2人は、それを危惧していた。

その病は、“デスレイブ”。
そう、呼ばれていた。

“デス”とは、「死」を意味する、“death”の英単語から。

“レイブ”は、「不治」の意味を持つ、“incurable”から。

このなは、複合語なのだ。

それも、この国特有の、外来語を勝手に組み合わせるといふやり方の。

そして、この病に関する実験とは、病を治せる可能性のある微生物の実験だった。

まず、マリアに、この、デスレイブを投与、マリアを感染させる。そして、完全な感染症状がでると同時に、抗体を、マリアに点滴投与。

効果が見られた場合、実験は、見事、成功。

マリアは、元に戻るだろう。

だが、もし、失敗したとき――

マリアは、その名の通り、「死（death）」ぬ。

この、娘を娘とも思わぬ実験を、トーマは、実行しようとしているのだ。

こんな 年端も いかないような 少女に

とても 残酷 で 非情 な 実験 を

けれど、マリアは、受け入れた。

解っていたから。もし、自分が拒めば、他の誰かが、犠牲になる。

父の身勝手な事情で、
関係のないヒトが巻き込まれると言うことを。

だから――

敢えて、彼女は、それに甘んじた。

そしてなにより、もしも実験を遂行すれば、
マリアは、父と母の傍にいられるから。

例え、実験の観察のためだったとしても、
2人は、マリアの傍にいるから。

もう、独りではなくなるから。

「解りました。実験台となること、
謹んで、お受けいたします」

彼女は、ただ、そう言った。

―死ぬときくらいは、独りじゃなくてもいいよね?―

心の中で、そう呟きながら……………

「様子はどうだ?」

「今日はだいぶんいいみたい」

父の一言が、何故か、この上なく優しく聞こえる。
母の報告が、どうしても、嬉しく感じる。

マリア自身は、実験台にされ、
点滴を繋ぎ、呼吸器をつけ、自由に動くことすら出来ない。

そんな不自由を強いられながらも、
マリアは、長年離れていた両親が傍にいる。

ただ、それだけで、手足の不自由は、どうしてもよくなっていた。

―お父様も、お母様も、私を心配してるんじゃない。

解ってる。でも、それでも、もしかしたら、気にかけて下さるかも知れない。

もしかしたら、対抗の次に、心配して下さるかも…

…

淡く、叶うことのない期待を抱きながら、マリアは、ただ、横たわり続けた。

「どうだ？」

「そうね、まだ、なんの変化もない。

まあ、あの子が死んだところで、

私たちには、なんの関係もないけれど。

でも、こつも不調が続くと、面白くないわね」

「そうだな……………」

マリアのいないところでは、2人の、こんなにも、
無慈悲で、冷たくて、残酷な会話が繰り返されていた。

まるで、マリアなど、どうなっても良いというかの様に。

いや、良いかのように、ではない。どうでも良いのだ。

この2人は、もう、マリアを娘としては見ていない。

ただの、実験台として、モルモットとして、見てるのだ。

一ヶ月が過ぎた頃。

彼女の容態は、急変した。

熱が高くなり、呼吸が上がり、動悸も激しくなる。

――末期であることを示す症状だった――

「くそっ、どうなっているんだ！私の理論は、完璧だったはずだ！
」

「落ち着いて！まずは、マリアを安全なように……！！！」

「これが、落ち着いていられるかっ……！！！」

トーマは、クルスに向かい、怒鳴り立てる。
それだけ、焦っているのだ。

彼は、前にも示唆したとおり、この国、屈指の学者だ。

だからこそ、面白くないのだ。
自分の理論が、間違っているとすると。

「何をしても無駄。

いい加減に、諦めてはいかが？

お父様」

「「！！！！」」

マリアの声が、凜と響いた。

さっきまで、あれだけうなされ、
呼吸すらままならなかったマリアが、
平然と口を開いた。

「マ、マリア、何を言っているんだ。

お父さんに任せておけば、全て、うまくいくんだ」

慌てて取り繕う父親の言葉に、マリアは、哀しそうに、首を横に振る。

それは、まるで、憐れんでいるようだった。

自分を誇示して、ただ、その地位を維持することしか、
自分を表せない父親を。

ただ、父親に縋り付き、七光りを浴びることしか、
生活という鎖をつなぎ止められない母親を。

- ただ 哀れ に 想 っ て -

「もう、やめましょう、お父様。いいのです」

「な、何がいいのだ！おまえに、何が解る！！」

怒鳴ってから、トーマは、ハツとなり、マリアを見やる。

「解りません。」

私には、お父様のお考えになることも、お母様がお思いになることも、何一つ、解りません。」

でも、と、マリアは繋げた。

「私には、見えるのです——
このまま滅び行く、この国の未来が。」

お父様が、対抗を発見したところで、
もう、既に手遅れになっている、この国が」

それを聞き、さっきまでの父親は、完全に消えた。

「そんなはずはない！！」

私は完璧だ。完璧でなくては、いけないんだ！！！」

狂気に満ちた瞳で、マリアを見つめるトーマ。

そこには、もう、“父親のトーマ”はない。“科学者”としての、
彼がいた。

「おまえは、実験台だ！私に逆らっては行けない。

おまえは、私に忠実でなければならない！

おまえなど、ただのモルモットに過ぎないのだ！！！！！」

——ッ……—

わかっていた言葉。いつか、そう言われると、知っていた。

でも。

マリアには、辛すぎた。

13歳の少女が、全てを受け入れ、納得し、
乗り越え、前を向くには、彼女の目の前の現実は、
マリアの、その細い肩に、とてもではないが、
背負いきれなどしなかった。

彼女の心は、選択の余地なく、粉々に砕け散った――

中編

— お父様も、お母様も、私のことなんて、気にはかけて下さらない。

知っていたのに、どうして、こんなにも苦しいの？

私は、どうして………？ —

涙が、溢れそうになる。
それを必死で押さえて、なんとか言葉を絞り出す。

「私は、実験台です。

そう、お父様が、それをお選びになった。

しかし、この実験が成功したとき、
世間は、なんと言うでしょうか？

娘を実験台にしてまで、研究をしたかったのか。
そう考える人も、少なからず、いらっしやるでしょう」

「だろうな。だが、そんなもの、功績の影には、全て消える！
私だから許されるのだ！！
おまえなど、誰も、気に止めはしない！！！」

静かに息をつき、マリアは、目を伏せ、下を向く。

―― 哀しんで ―

当たり前のことを言われ、
こんなにも泣きそうになってる自分を、情けなく思っ

それを、肯定と、諦めの意図として取ったのだろう。

トーマは、目を見開き、歓喜に満ちた。

「どうだ！ 諦めたか！！ 理解したか！！
所詮おまえは、ただの実験台なのだ！！！」

「違う！！！」

マリアではない。クルスでもない。
この場には、いないはずの人間の声が、トーマの言葉を、大きく遮った。

そう、そこにいたのは――

「貴方は……確か、学校の………」

そこにいたのは、マリアの、学校でのクラスメート、サヤキ・シャルナーク。

そのサヤキが、何故、此処にいるのだろうか？

「マリアは……」

あつ、えと、マリア様は、実験台じゃ………！！！！」

思わず、マリアを呼び捨てにするが、慌てて訂正する。

けれど、マリアは、サヤキに駆け寄り、二の腕辺りの服を掴み、こう言った。

「い、今、なんて言った？」

「え？ ま、マリア様は……」

「違う！ その前……！」

あまりにも強く言うマリアに、
反感を買ったと思い込んだのか、サヤキは、
思わず、すみません、と謝る。

しかし、マリアは、そんなつもりではなかった。

違う、怒っているのではない、と、
そう言いながら、もう一度、と、催促する。

「マリアは……」

マリアの勢いに飲まれ、サヤキは、思わず、そう言った。
それを聞いたとき、マリアの顔は、灯がついたように、明るくなる。
さっきまで死にかけていたとは、到底、思えない。

——…ありがとう——

掠れる声で、マリアは、そう言った。

・マリア・

その一言が、マリアにとっては、どんな賞賛の言葉よりも、嬉しかった。

「……ありがとう……」

サヤキの胸に顔を埋め、ただ、ありがとう。
そう、繰り返すマリア。

サヤキは、何故、マリアがこれほど喜んでいるのか、わからなかった。

けれど、この少女がやっと、“自分”になれた、と、それだけを、強く感じていた。

「何が…何が実験台じゃないよ！

こんな娘なんて、実験台以外に、使い道もない！！」

ヒステリックな声が響いた。クルスだ。

けれど、その耳の痛くなる金切り声さえ、今のマリアには、どうでもよかった。

ただ、サヤキの声が、優しさが、嬉しくて。

“マリア様”ではなく、自分を見てくれたサヤキが、とても、いとおしく思えて。

「無理言って、ごめん……でも、ありがとう」

涙が、頬を伝う。感情の制御が、利かなくなってる今、涙は、止め処なく流れ続ける。

ところが。

けほ、と、一つせき込む。口から、血が、零れた。

けれど、マリアは、それにさえ構おうとしない。

サヤキは、一瞬、驚いたような表情をしたが、続けて、と、促すと、

サヤキは、言うつもりであったのだろう続きを、言葉にして紡ぐ。

「マリアは、実験台なんかじゃない。俺の大事な友達だ。

もしかしたら、マリアは、何とも思っていないかも知れない。でも、俺はずっと、マリアを見てきた。

マリアが、誰より優しいって、ちゃんと知ってる。

実験で失うには、勿体なすぎるほどの、いいやつだ。」

言葉の一つ一つが、心に響き渡る。

今まで、どれだけ、自分を偽ってきただろう。

どれだけ、自分から苦しんできただろう。

本当は、もっと早く、みんなと喋りたかった。

何度も、輪の中に入りたいと思った。

でも、“自分”と、“スティーゼア家の後継者”
という肩書きが、それを許さない。

- ヒトリ デモ ハイキ デシヨ？ -

たくさんの人にそう言われ、ずっと、疎外されてきた。

優しい悪意

一見、矛盾しているような言葉だが、
皆、マリアのためと思って、マリアを独りにした。

けれどそれは、ただ、マリアを傷付けているだけだった。

優しさが、相手を傷付ける。

そして最後には、傷つく自由さえも、奪ってしまふ。

マリアはずっと、“優しい悪意”に晒され続け、そして今――

いつの間にか、慣れてしまった心。

なにも感じなくなり、全てを拒絶した。

そうすることで、自分を守ってきた。

そして、これからも。その筈だった。

なのに…。

「サヤキ……だっけ？

ごめんね、驚いたでしょ？ ごめんね」

「謝るなよ……謝るんじゃないで、助かる方法を考えろよ。
死ぬなよ……！！！」

切ない。

それが、一番正しい。

2人の気持ちを表すには、これが、一番正しいだろう。

—死ぬな—

誰も、そんなこと、言ってくれないと思ってた。
私のことなんて、気にも留めない、って。

でも、サヤキは、死ぬなっていってくれた。
嬉しかったよ。

ありがとう、サヤキ。

でも、もう、手遅れなんだ。

遅すぎた。

心の中で、伝えたいことを、全て言う。
言葉になんて、できるはずない。

サヤキに、迷惑かも知れないから。

でも。

サヤキも、マリアを死なせたくなんてなかった。

なんで、マリアなんだよ。

マリアはどうして、こんな家に生まれたんだ。
此処じゃなくても、よかったはずだ。
なのになんで。

マリアが、こんなに苦しむんだ。

ふざけるな——！！！！

「サヤキ……ねえ、私ね、一度でいいから、
外を、自由に歩きたかった。」

もう一度、自分で、動きたかった。

好きな人を、作りたかった。

その人と……キス……したかった……」

そつと、唇が重ねられる。

冷たい、涙の味。

哀しい、血の味。

- 切ない 死の 味 -

マリア・・・？

サヤキがそう思う間もなく、マリアの体は、崩れ落ちた。

「マリア？」

おい…おい！！ 起きろよ！ マリアー！！」

伏せられた目。青白く、動かない指。

優しく 笑った 口元

「なんでだ……？ なんで、おまえが……
死ぬなって、言っただろ？ 勝手に、逝くなよ。
なんで、こんな時まで、笑ってんだよ………」

徐々に、サヤキの体から、“チカラ”が溢れ出した。

「おまえらなんか……こいつを殺す権利は……なかった」

—ゴオオオ—

力が、溢れた。

「マリア……あの子、このサヤキってこに、力を渡してる！
このままじゃ、あの力を、暴走させられるわ！ どうにかしないと……！」

「ふん、それなら、そのチカラを取り込んで、逆に利用してやれば
いい！」

あんな小僧くらい、押さえるのは………うわぁ……！」

トーマの体が、勢いよく飛んだ。

「マリア、ごめんな。守れなくて。
こいつら、一緒に倒そう」

抱えていたマリアの体を、そっと、床に横たえ、手を翳す。

光が、掌から溢れ出した。

「行こう、マリア。恐く、ないから」

マリアの体が、浮き上がり、光に包まれる。

・
パ
ア
ア
・

マリアが、足を踏み出した。

始めは、ゆらゆらとおぼつかない足取りだったが、
今、マリアは、しっかりと地面に足をつけ、
前を見据え、立っていた。

—ありがとう—

マリアの声が、サヤキの頭に響く。
驚いてマリアを見ると、笑っていた。

とても 幸せそうに

—私たちの茶番に、付き合ってくれて、ありがとう。
あいつら倒して、全部、終わらせよう！—

だっ、とマリアとサヤキ。2人が、同時に駆け出す。
マリアは、トーマ。サヤキは、クルス。

2人にむかって、攻撃を繰り出す。

これが2人の、最初で最後の、本当の戦いだっ
た――

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n5171b/>

たった独りの人形の たった一度の晴れ舞台

2010年12月25日18時09分発行